

参戦武将の明暗を分けた長久手合戦

長久手合戦の歴史的意義

天正十二年（一五八四）、長久手での決戦は秀吉方に味方した池田恒興（信輝とも伝わり勝入と称す）、嫡男・紀伊守元助（之助とも）、娘婿・森武蔵守長可の前途有為な三将が討死し大勢が決した。局地戦であり厳密には秀吉の本隊と戦った訳ではなくその一支隊を破ったに止まるが、それでも当時不敗を誇る秀吉勢を破ったことが家康一代の誉れとなり、後年の天下取りに際して大いに役立ったのである。たとえフロックであれ、当時の武将で一度たりとも秀吉に勝った者はいなかったのである。家康が若し敗れていたら、降伏して大名クラスで残るのが精一杯でとても後年天下を望むことは叶わなかったであろう。その意味では、秀吉がどこまで意識していたかは判然とせぬが、家康に取っては非常に意義深い合戦であり、正に運命の一戦であったと言えるのではなかろうか。

世上、小牧・長久手の戦いと称され、小牧の戦いと長久手の戦いが並列に取り上げられていることが多いが、小牧の戦いは天正十二年三月から十一月にかけて八ヶ月間に亘り行われた秀吉対信雄・家康の實質上天下の覇権をかけた天下分け目の総力戦であり、長久手の戦いは、犬山城奪取戦、羽黒の戦い、伊勢諸城の攻略戦、蟹江城攻防戦やその他の戦いと同様にその中の一部を構成する局地戦に過ぎないのであるが、それを小牧の戦いと並列の戦いのように持ち上げられたのであった。

秀吉軍は羽黒・長久手・蟹江では敗れたが、何れも敵地へ踏み込んでの戦いであり、寸土の領土も失っておらず、むしろ犬山城を押え、尾張に侵入し、伊勢・伊賀を攻略し領土を増やしているのである。しかも最後は、主将とも言うべき信雄を巧みに調略して家康と分断して有利な単独講和に持ち込み、家康の大義名分を失わせ、窮地に追い込んでいるのである。後には家康を上洛させ臣従を誓わせていることから全体を見れば明らかに秀吉の勝利であり、家康の敗北であるが、徳川氏は徳川幕府時代を通じて長久手の一戦を政治的な意味合いからも過大に評価し太閤秀吉を破った神君家康公として宣伝これ努めたのである。家康を神君とする伝説はこれに限らず非常に多いのであることを改めて認識すべきであると考え次第である。

多くの御用史家や長久手に参加した家臣らにより補強されやがて伝説に近いものが構成されたのであろう。四月九日に行われたたった一日の合戦にも拘わらず、実に数多くの史料が遺されていることがその間の消息を雄弁に物語っていると思われるのである。

池田恒興と森長可

中入りが成功していれば池田恒興や森長可は豊臣政権の中樞を担う重臣になったことであろう。二人は門地・閲歴から十分その資格のある人物であったのである。

池田恒興は故信長の乳兄弟であり幼少より信長に仕え歴戦の功あり、荒木村重討伐の功により、荒木滅亡後は村重の旧領を得て伊丹に居城、大和郡山の筒井順慶、摂津茨木の中川清秀、高槻の高山右近らと共に明智光秀の組下大名であった。年齢的には秀吉とほぼ同じであり、それまでは、佐々成政

や前田利家クラスの武将であったが、「本能寺の変」以降は秀吉方に味方し山崎の戦いで手柄を立て、清洲会議では敗亡した明智光秀や北条氏に敗れ勢威を失った滝川一益に代わり、柴田勝家、丹羽長秀、羽柴秀吉から宿老扱いを受けて一躍織田家の重臣として重きをなすに至った。

清洲会議を有利に進めんとする秀吉は恒興を大いに引き立て、従来領地であった池田・有岡の旧領に加え新たに大坂・尼崎・兵庫の十二万石を加封し自陣営に引き入れたのであった。秀吉はさらに念を入れて、恒興の娘と甥・三好秀次の婚姻を取り交わし、恒興の三男・信吉を自分の養子分に迎える約束までしたと伝わる。

恒興は一躍二十八万石の大大名となり且つ織田家重臣の一人に列することになった。これによりそれまでは出世競争では雁行していた佐々成政や前田利家らに大きく差を付けたのである。恒興が山崎の戦いに参加出来たことが何よりの恒興の幸運であった。

一方、恒興の娘婿の森武蔵守長可は信長の信頼が厚かった重臣森三左衛門可成の二男で若年ながら勇猛を以て聞こえ、世に鬼武蔵と謳われた勇将で美濃兼山（金山）の城主であった。信長・信忠の信任は極めて厚く織田家との縁は深いものがあり、信長・信忠横死後は、本貫の地が美濃であることから弟を人質に差し出し岐阜城の信孝に属していたが、信雄の命と称して秀吉が三法師を岐阜城から安土城へ移さんとして岐阜城へ押し寄せた頃には人質を取り戻して、信雄や秀吉の側に立っていた。八幡太郎源義家の流れを汲むとされる森家（義家の六男（七男説あり）・陸奥六郎義隆が相模国愛甲郡森庄に拠って、森冠者と号したのに始まるというが異説もある）は代々勇武の将が多く、槍の名手で「攻めの三左」と異名を取った父・可成は信長の重臣であったが、元亀元年（一五七〇）浅井・朝倉勢が進撃して来た際に防戦し織田信治共々衆寡敵せず惜しくも宇佐山で戦死し、長兄・伝兵衛可隆は、同年、父に先立ち、朝倉攻めで敦賀手筒山城に先登して名誉の戦死を遂げた。享年僅かに十八歳であった。

信長は可成、可隆の忠節に感じ、森家に対して格別に配慮し、未だ若い二男・長可に父・可成の遺領を相続させ引き立てる。

父や兄の死により家督を継いだ長可は伊勢長島一揆の制圧や、信忠に従い甲州攻めで手柄を立て、川中島四郡を加増されて二十万石を領するに至る。信長、信忠の信頼が厚い武功の士であった長可は織田家の天下が続けば相当な大身になる将器であった。

長可の三人の弟達もそれぞれに秀れた若者で信長の近習として仕えた。有名な蘭丸（長定）、坊丸（長隆）、力丸（長氏）であるが、惜しいかな、本能寺の変で信長に殉じて若い命を散らした。滝川一益や川尻秀隆と並び森長可も本能寺の変の影響を最も強く受けた一人であった。

秀吉と信雄の確執と家康の去就

秀吉が勝家を賤ヶ岳に破り、信雄をして信孝を自刃せしめ信長の後継者の一番手と目されるに及んで、それまでは信孝・勝家との対抗上、信雄を押し立てていた秀吉と信雄の間に確執が生じる。

信孝自刃後は、三法師の後見人の役割を果しつつある自分が織田家の相続人と信じて疑わない信雄と、信長・信忠の死により織田家の天下は終わったとし、自らが天下人を目指す秀吉とではいつまでの友好関係が続くべくもなかったのである。正に同床異夢の関係になったのであった。

この間、家康は信長横死後の混乱に乗じて巧みに甲斐を手に入れ、信濃の一部をも支配下に収めて織田家の内訌を慎重に見定めていた。火事場泥棒的な動きであった。北条氏も兵を出し甲斐や信濃を

窺う勢いを示していたが、北条氏と徳川氏は甲斐の北西部の地である若神子わかみこの陣で手打ちをして、上州一円は北条氏、甲斐と信濃は徳川氏の勢力圏で折り合い、北条五代・氏直と家康の二女・督姫の婚姻が約定されたのである。

家康は信孝・勝家と信雄・秀吉の抗争には中立の立場を取り積極的には動かなかった。内訌が長引いて織田家の力が弱まることは家康にとってはむしろ望むところであった。漁夫の利を狙っていたのであろう。

しかしながら、家康の予想に反し、秀吉の動きは目覚しく瞬く内に丹羽長秀以下、蜂屋、池田、森、堀、筒井、細川、蒲生、氏家、稲葉ら多くの織田家の将領を味方に付け信孝・勝家・一益らの反対勢力を打ち破り、北は上杉、西は毛利と結び大勢力を形成するに至ったのである。

家康はこれには大いに驚き、取り敢えずは秀吉の覚えも目出度い重臣石川数正を戦勝祝賀の使者として大坂の秀吉の下に派遣し、慎重に天下の帰趨を見定めんとする。

長年、信長の同盟者として、秀吉よりは格上と自任する家康は織田家の五大軍団長の一人で逆臣明智光秀討伐に手柄を立てたとはいえ陪臣に過ぎぬ秀吉が織田家の遺児をないがしろにし、信長の同盟者であった自分にもろくな挨拶も無いままに巧みに天下人に成り上がろうとの野望をこのまま座して見過ごしその下風に立つ気持ちはいささかも無く秀吉を倒す機会と大義名分を求めていた。

家康の心中としては、戦国時代には珍しいとも言える長きに亘る織徳同盟で家康は信頼するに足る律義な人物との世評を得ると共に多くの領土も得たが、その間の信長に対する滅私奉公的な協力は多大なるものがあつたし、正妻・築山氏や嫡男・信康も信長の命令により失っている。家康は信長の苛烈で時として見せる酷薄な性格を十分承知しており、信長の天下統一が進めば、その過程で徳川家がどのような待遇を受けることになるのか期待と同時に不安も感じていたのである。家康には信長は警戒すべき恐るべき人物であったのである。信長の突然の横死は実に驚くべき青天の霹靂ではあつたが、ある部分、家康をして安堵させるものもあつたことであろう。このことから、信長暗殺の首謀者として家康の名前を挙げる研究者も多いのである。

余談ではあるが、異説として御礼言上で安土城に伺候する家康を信長が討つとの説が流れたとの話も遺されている。明智軍の兵が書残した日記に信長公の命を受けて主人の光秀が家康を討つというものであつた。兵等の多くはそれを信じていたとされている。実に油断も隙も無い時代であつた。

家康から見れば、強豪武田氏は滅びたし、関東の覇者ともいべき北条氏とは和睦し縁戚となつたので背後を突かれる懸念はなくなつたし、謙信死後の上杉氏は遠国でもあり直ちに干戈を交えるような敵対関係にはない。加えて版図は広がり兵も充実し士気は極めて高い。家康やその家臣に取っても乾坤一擲の勝負に出る時が来たと思つたことであろう。

秀吉と信雄の和解工作の失敗

この時期、信雄と秀吉の争いを何とか回避せねばと織田家遺臣の丹羽長秀、池田恒興、蒲生氏郷ら双方に縁の深い人々が両者の和解に奔走していた。両者が園城寺で会いそこで誤解や不満を腹藏なく話し合うことにより解決し双方の友誼を旧に復させようというものであつた。

しかしながら秀吉は会見の前日に信雄の四人の老臣である津川義冬、浅井長時、岡田重孝、滝川雄利と面談し、世上何かと三介様（信雄）と筑前との間に亀裂が生じているとの噂があるようであるが、自分は三介様に対し忠義を尽くしており、いささかも粗略にしていなからして理解を求め、若しも三

介様に誤解があるようであれば、重臣方が良くそのことを三介様に良く説明して疑念を晴らし無用な誤解を解くよう依頼したのである。秀吉一流の布石であった。

これに対し、津川、浅井、岡田は秀吉の言を信じ主君信雄と秀吉の宥和を図ろうと腹を決めたが、今一人の老臣、滝川雄利は他の三人とは異なり、老獪な秀吉が巧みに三人の老臣を取り込もうとしていると考え、その旨を信雄へ復命した。驚いた信雄は園城寺へ行けば秀吉一味に討たれるか詰め腹切らされる懸念ありとして、秀吉に無断で会議に出ずに急ぎ本拠の長島城へ帰ったのである。

秀吉はこの間の事情を十分承知しながらも信雄の約束を反古にしての突然の帰城を大いに憤慨し糾弾した。自分が政務多忙にも拘わらず、世上の誤解を解くため遠路出張って来たにも拘わらず、調停に骨を折った人々や自分の誠意を無視して断りもなく会議を壊した所行は断じて許し難いと満天下に触れたのである。世論操作に巧みな老獪な秀吉の計算通りであった。信雄側の非によって和解工作が壊れたとすることは正に秀吉の望むところであった。主筋の信雄と事を構えるには天下を納得させるだけの大義名分が必要であったのである。

信雄の依頼を受け家康立つ

長島城に戻った信雄は三人の老臣が秀吉に取り込まれ、自分をないがしろにして秀吉の肩を持つのは裏切りであるといきり立ち、腹心の家臣を集めて善後策を協議する。滝川、土方らは今にして秀吉を討たねば千載に悔いを残すとして、信雄が兵を挙げれば、丹羽長秀、池田恒興、森長可、佐々成政らの織田家恩顧の家臣らも駆け付けようし、毛利氏、長宗我部氏や本願寺、雑賀、根来衆も味方に付くであろうと申し述べた。秀吉を甘く見た楽観的な見方であった。

信雄は、家康を味方に引き込むことを考えた。すぐ思い付く策であった。徳川軍が加わることでより、十分勝機が掴めるとして家康との同盟を急ぐ。いずれ秀吉との対決は避けられないと覚悟し兵を挙げる大義名分を求めていた家康に取って信雄よりの同盟の申し入れは正に望むところであった。信長の遺児である信雄の懇請を受けて止むを得ず立つとの大義名分が得られたのである。

要請があるや家康は躊躇なく信雄を押し立てて、秀吉が信長より多大なる恩顧・引き立てを受けたにも拘わらず大恩ある織田家を裏切り織田家篡奪の野心を露にしたのは大逆無道であると満天下にその非を鳴らし秀吉と雌雄を決することを公然と表明したのである。

家康の全面的支援を得た信雄は秀吉討伐の兵を挙げここに戦国末期を飾る秀吉、家康の名勝負が始まる。家康の進言で秀吉に内通の可能性ありと見られた、津川、浅井、岡田の三老臣を始末するのがまずは肝要ということに決した。信雄は三老臣に「あの折りは色々あって気まずいことになったが、その後自分も考えてみた。その方らの進言通りここは秀吉と和を講じるのが良いと思い直したので、そのことにつき何かと相談したい」と巧みに誘い出し長島城内で謀殺したことが事実上の宣戦布告となった。

秀吉の巧みな反間策に引っ掛かり三家老を誅したと聞き、家康は信雄の拙速な処置に不快感を隠せなかったとの話もあるし、家康が使唆したとの話もある。真実は不明であるがとにかくにも運命の賽は投げられたのであった。

秀吉の出陣と織田家諸將の去就

双方は味方を増やす必要から、それぞれに遠交近攻策を取り味方を募る。秀吉は三介様と止むを得

ず戦端を開くことになったことを丹羽長秀に伝え協力を要請する。長秀は信雄を主君と考えており下手をすると敵に廻りかねない。秀吉のこの戦は三介様が思い立たれたものではない。裏に織田家の篡奪を目指す家康がいる。自分は家康の野望を砕くために働く所存であり、三介様を主君と仰ぐ気持ちは貴殿と同様であり、戦ったとしても三介様には指一本触れぬつもりである。どうかこの秀吉を信頼して協力して貰いたい旨を伝えた。しかも長秀が直接、信雄と戦うことを避ける意味からも、北陸方面で敵に廻ると思われる佐々成政を押さえて貰えば有り難いとまで気を遣っている。

長秀もこの秀吉の申し入れを全面的に信用した訳ではなかったが、家康が油断ならぬ人物であることと、秀吉が三介様に対する忠誠心を失っていないことや三介様の身柄は必ず守ることを天地神明にかけて堅く約したことから秀吉側に立つことを決めた。織田家重臣で律儀と公正の評があった長秀が秀吉側に立つ効果は大きかった。賤ヶ岳の合戦と同様に多くの織田家恩顧の武将が秀吉側に味方したのであった。何やら後年の関ヶ原の合戦に見る家康と福島正則の関係に似ている面がある。

池田一族と森長可の羽柴方参戦

(犬山城奪取と羽黒の敗戦)

さらに秀吉の根回しにより一躍宿老に抜擢され、当時大垣城主（摂津に領地を得て大坂に居城していたが、秀吉の要請で大坂を秀吉に譲り、大垣に居城していた）であった池田恒興には双方から誘いがかけられた。

信長の乳兄弟であることから織田家と縁が深く、二男・輝政を人質として信雄に差し出していたことから、当然、信雄・家康方に付くと思われていた恒興であったが、信雄が恒興を信じて輝政を返したことで、秀吉から美濃・尾張・三河の三国を与えるとの約束を貰ったことからそれまでどちらに味方するか迷い抜いていた恒興は重臣伊木忠次の具申を容れて秀吉方に味方することを決めた。老巧な恒興は直ちに兵を動かし、勝手知ったる要衝犬山城を奪取する手柄を立てたのである。

森長可も秀吉より駿河・遠江の二国（一説には甲斐も望んだと伝わる）を与えるとの約束を貰い、舅・恒興と共に秀吉方に味方することを決意した。恒興の場合も長可の場合も恩賞が余りにも多すぎる。おそらくは事実ではなかろう。

長可は舅が一番手柄を立てたので自分も負けずにと気負ったのか、大領を約束された以上それに見合う手柄を立てねばと思ったのか要衝の地と思われる小牧山の奪取を目指し、味方から突出した尾張の羽黒村に進出して勇敢にも孤軍にて野営した。小牧山を要衝の地と見て目を付けたのはさすがであったが、如何せん孤軍であり三千程度の軍であった。長可は恒興ら味方と十分に打ち合わせの上で慎重に事を運ぶべきであったが、抜け駆けの功名手柄を当時の武人は非常に大事にしたもので、長可も例外ではなかった。舅とはいえ、恒興には対抗意識があったのか両者で小牧山奪取につき打ち合わせをした形跡はないとされている。

家康方は犬山城を奪われたことを残念に思っていたところ、上方で武名の高い武蔵守が僅か三千の兵で孤軍野営しているとの報告を受け、犬山の恨みを晴らし全軍の士気を鼓舞するには絶好の標的と見て、酒井忠次、奥平信昌、榊原康政、大須賀康高等の歴戦の将と精兵五千による攻撃を決意した。不意を突かれた森勢も態勢を立て直し懸命に防がんと奮戦するが家康軍は数に勝り犬山の仇を討つとの意気込み凄まじく、戦い半ばに武蔵守も負傷、さしもの森勢も敗走した。森勢が敵襲を受けたと聞き、恒興は直ちに援軍を繰り出さんとしたが、日没が迫っていたことと敵情把握が不十分で迂闊な攻撃は危険との部下の慎重論を容れて救援を断念したという。

舅・恒興の折角の手柄も娘婿・長可の敗走で帳消しになったのみならず、救援をしなかったことが臆病な振る舞い等色々と味方の中で取り沙汰され恒興も何とか名誉挽回を図りたいと考えるに至るのである。通説では、後の中入り策の進言はこの延長戦にあるとされている。長久手合戦の始まりは羽黒の戦いにあつたと云えよう。最近では恒興や長可の献策ではなく秀吉の命であつたとする説も出ているが俄かに首肯し難いと思う。羽黒の戦いで主君長可を逃すために森軍の豪の者として聞こえていた野呂助左衛門宗長が奮戦して討死した。

池田親子と森武蔵守の中入り献策

小牧での対戦は、羽柴勢は相手方の三倍以上の大軍（一説には秀吉方八万～十万、家康方は精々が二万との説もある）であるが、小牧山を占拠し地の利を得た家康方が堅固な砦を構築しているため攻めあぐねた秀吉方も楽田城を中心に防御を固め対峙した。双方が相手方の出方を窺う小競り合いに終始したため戦局は動かない。先に仕掛けた方が不利になるとの認識で双方の睨み合いが続き戦線は膠着する。

遂に恒興は嫡子・元助や武蔵守長可とも図り秀吉に、家康の本拠である三河岡崎への中入りを進言する。両軍の睨み合いで家康の主力は小牧に張り付いており本拠は手薄である筈につき、密かに一軍を割いて別働隊となし敵の本拠の岡崎を突けば必ず勝利を得られるであろうとの献策であつた。岡崎に達しなくても後方を攪乱されれば、家康方は大いに慌てることであろうから陣形が乱れ戦局は大軍を擁する秀吉方有利に動くとの読みもあつたであろう。また、本隊と中入り隊で挟み撃ちにすることも可能になる。確かに一理も二理もある策ではあるが反面大いなる危険も伴う作戦であつた。先の賤ヶ岳の戦で、膠着状態を打破すべく秀吉の留守を狙い、勝家方の猛将佐久間盛政が中入りを強硬に進言し、緒戦は猛将中川清秀を大岩山砦に討ち取り、岩崎山砦の高山右近、賤ヶ岳砦の桑山重晴を走らす等華々しく成功したが予想を遥かに超えた秀吉の神速なる大返しにより敗れ全軍敗戦の因をなしたことで知られる通りで成功すれば大きいが下手をすると戦局全体の帰趨に関わる敗因となりかねないのである。

さすがの秀吉も暫し沈思黙考する。秀吉としては何とか兩人に中入りを思い止まらせたところだが、恒興、長可は必死の覚悟を面上に溢れさせ献策が受け入れられんこと願って止まない。既に進撃路の途中の土豪を味方に誘う等の調略も了していたという。兩人に取っては正に名誉挽回、起死回生の一手なのである。秀吉にもその気持ちは良く理解出来る。賤ヶ岳の戦いとことなり、秀吉側が圧倒的な大軍であるので賤ヶ岳の二の舞になるとは限らない。勝機は十分にある。大軍を擁して動かないのは味方の士気にも拘わるし、両者の対決を注視している諸勢力に与える影響も無視できないものがあつた。

傍らに控えていた秀吉の甥で恒興の娘を娶ることが決まっていた三好孫七郎秀次が兩人の献策に賛同し、出来ることならば自らが将として参加したいと述べた。秀吉は中入りには不安があるが、決死の献策を断れば、武人としての面目を失い窮地にある池田一族や森武蔵守が最悪の場合、味方を裏切り相手方へ廻りかねないことまでも頭に入れて遂に承認したのであつた。

後年の太閤秀吉の如き絶対的権力はこの当時の秀吉には無く、同盟軍の盟主のような立場であり、明智討伐以来の有力な味方でつい最近までは格下とはいえ同僚のようであつた年齢も近い歴戦の雄と自他共に許す恒興に対して高飛車に命令出来る立場にはなかつた。秀吉の辛いところであつた。

中入り作戦を了承した秀吉は総大将を甥の三好孫七郎とし、軍監として若年ながら戦上手で聞こえ、秀吉の信頼の厚い堀久太郎秀政を付け総勢二万の中入り隊としては異常ともいえるべき大軍とするのである。これは小牧に陣する信雄、家康軍とほぼ同数である。孫七郎の護衛と秀吉の中入りに対する不安が大軍を構成させたとも考えられる。

秀吉は清洲から岡崎に至る街道筋にある小幡城を押さえることが肝要との指示も出したという。指示が徹底されなかったのか、中入り隊は小幡城奪取を念頭に置いていなかったようである。中入り隊が奇襲にならず敵に知られても構わぬ、その場合は敵の追撃隊を中入り隊と秀吉本隊で挟み撃ちにすれば良いとの考えもあったことであろう。ともかく戦局が動けば大軍である秀吉側が有利となる。作戦の細部が多少杜撰であっても数に物を言わせて押し切れば良いと考えていたふしがある。尚、中入り作戦は通説では池田恒興と森長可の献策とされているが、昨今は秀吉自身が発案した作戦であるとの説も出されている。作戦が結果的に失敗したので秀吉に傷を付けぬために池田や森の献策としたとの説である。その可能性もあり一考に値する説であると思われる。

中入り隊の進発

中入り隊の進発を悟られないために秀吉軍は陽動作戦として家康方の正面を攻める。四月七日、中入り隊は密かに楽田の陣を脱して、南下し一路三河を目指す。大軍であり、細作や付近の農民の連絡等により、すぐに家康方の知るところとなる。

中入り隊は何よりも隠密裏の行動と迅速な進撃を旨とすべきであった。本来なら押さえの兵を置き、打ち捨てて先を急ぐ予定であった取るに足らない砦の如き岩崎城の丹羽氏次が兵を励まし勇敢と言いか無謀にも先頭に行く池田隊に鉄砲を撃ちかけて来たのに業を煮やした恒興が戦陣の血祭りとはばかりに城攻めを命じたため、全軍の行軍が遅れたことも災いした。多勢に無勢で城は落ち丹羽勢も壊滅し、主将の丹羽氏重（氏次の弟）は討死した。恒興は先を急がずに悠々と首実検をしてさらに貴重な時間を費やしたとされている。

家康の中入り隊追撃

(秀次隊の壊滅と秀政隊の反撃)

家康も中入りには驚愕したが直ちに水野忠重、榊原康政、大須賀康高らの精鋭に追撃隊を先発させ小幡城の確保を命ずる一方で、酒井忠次、石川数正、本多忠勝等に小牧の守備を任せて自身、同行を願う織田信雄を伴い、四月八日には兵を率いて追撃に移る。即断即決果敢なる判断であった。

家康方本営も思わぬ中入り隊の進発で対応に腐心し実に緊張した状況が続く。正に切所であった。秀吉方に中入り隊を追撃する部隊を出したことを悟られぬようにせねば手薄になった本陣を強襲されることになるし、中入り隊の指揮を家康自らが執っていることも知られたくはなかったのである。中入りも大変だが追撃する側も大変であったのである。包囲する秀吉軍の監視の目を逃れて小牧の陣を出るのは容易ではなかったと思われるが、不思議なことにこれに触れた記載は無い。中入り隊を追撃する徳川勢が出たとの情報が中入り隊に伝われば状況は変わる。

家康軍の追撃に気付かず最後尾に行く秀次隊が狙われた。他の三将に比べて若く戦歴に乏しいことと、主将であり秀吉の甥ということで狙われたのである。本拠を突かれてはならじとの眈を決した必死の覚悟の追撃隊と、油断からか後方への索敵を怠り、白山林での朝餉の最中に不意を突かれた秀次

隊とでは戦にならなかった。

撃破された秀次隊は乱れに乱れ、軍配を預かる田中吉政自身が防ぐこともせず先を行く堀秀政に救援を求めに馳せつけ、秀政から貴殿は臆されたのかと強く叱責される始末で、本軍とも言うべき三好隊が緒戦に壊滅したのが大誤算で中入り隊敗戦の序曲となった。

主将の秀次が若く戦歴が浅いのであれば、それを支える部将がしっかりしなければならない筈であるが、そのような有能は部将がいなかったようである。木下祐久（秀吉の正室寧々の父・杉原定利とも伝えられるが不明）やその弟の木下利匡きのしたとしただを初めとして多くの木下一族が、秀次を逃がすために討ち死にした。

勢いに乗る水野、榊原、大須賀隊は堀隊に向かう。堀隊は、先方の池田隊が岩崎城を攻めている間、進軍を中止しかねはぎわら金萩原に展開し休息中であつたが、後方の銃声が聞こえるや斥候を放ち三好隊が壊滅したことを知った秀政は事態の急なることを悟り、三好隊の敗残兵を收容するかたわら、部下を励ましてひのきがね松ヶ根に二列横隊の堅固な陣を敷き銃隊を伏せさせ敵の来襲を待った。

地の利を得た堀隊が体制を整えて備えているのを望見した水野、榊原、大須賀の諸将は部下を押さえんと躍起になるが、三好隊を撃破し騎虎の勢いとなった部隊は止まらず、鎧袖一触とばかりにそのままの勢いで堀隊に向かった。

十分に引き付けた堀の銃隊が秀政の号令一下斉射し、たまらず崩れ立つところに槍隊・騎馬隊が突撃し敵を撃破し三好隊敗戦の挽回に努めた。

秀政は散々に敵勢を追い散らすやがて前方の富士ヶ山に見慣れた家康自慢の金扇馬印を見出す。家康自らの出馬を知り秀政は中入り作戦の失敗を悟り、主将の三好秀次を守護し、残存の三好隊を收容し楽田への帰陣を決意するのである。勝ったとはいえ三千の堀隊の損害も大きくこれ以上の戦いは無理と感じたのであろう。家康軍が池田・森隊と堀隊とを分断する位置に陣を敷いていたといわれている。

前方を行く池田隊、森隊より合流して一緒に家康軍と戦おうとの要請が来るが秀政は「無用である。堀久太郎は負けと決まった戦はせぬ」と応えて引き返したと伝わる。堀隊も合体して徳川軍と決戦すれば戦いの帰趨は分らなかったとも思われる。軍監の秀政が引き返し、秀吉からは何等の咎めを受けていないことを考えると、この時に秀政からも両隊に対し、中入りの中止と本陣へ引返すべしとの進言がされたと思われ、秀政と恒興・長可との間で種々のやり取りがあつた筈だが事実関係は不詳である。

池田、森隊と家康軍の対決

(恒興、元助、長可の戦死)

恒興、長可にしてみれば自らの献策が破れ、本隊ともいうべき秀次軍が壊滅した今となって何の面目が在っておめおめと本陣へ帰れよう。武人の面目にかけても帰陣は出来なかったのであろう。ここに池田・森の総勢九千の部隊は家康軍主力と決戦する悲壮な決意をしたのであつた。返し備えは崩れ易い。数に勝り、有利な地を占め、強力な鉄砲隊を有する家康軍に押され、池田・森隊は序盤こそ五分の戦いを進めるが次第に押され始める。

頽勢を挽回せんと長可は精鋭の馬廻りを率いて果敢にも、水野忠重隊に向かい騎馬突撃を敢行するが、水野清作の鉄砲隊に狙われて馬上にて銃弾を浴び、戦場の露と消えたのである。行年27歳の若

さであった。その日の長可は白装束に身を包み勝たずば生きては帰らじとの悲壮な覚悟の出陣であった。彼の有名な愛馬「百段」は主人の戦死後も乱軍の中を駆け回り無事帰還し一層の哀れを誘ったと伝わる。森一族の期待を一身に背負っていた稀代の猛将長可も長久手にて戦死して遺されたのは、末弟の六男・千丸（後の忠政）だけとなったのである。実に度重なる悲劇であり武門の厳しさが胸に迫る。

長可は戦に先立ち、遺言を遺している。死後、開封せよとし秀吉家臣で軍監であった尾藤知定に託した遺言によると、唯一遺された男子の千丸は引き続き秀吉に仕えるように、但し、兼山城は要衝の地につき、千丸ではなく、誰か然るべき武将を入れられるべし、また娘の「おこう」（長可には子がいないので続柄不詳）は武士ではなく医者に嫁がせるようにと書かれている。若くして勇名を馳せた鬼武蔵の遺言としてはいささか奇異に感ずるが、父や兄弟の死や戦場での多くの死を見つめて世の無常を感じていたものと思われ鬼武蔵と称せられた猛将の思わぬ一端を垣間見た思いがする。

主将を失い壊走した森勢に続き池田勢も崩れ立ち、乱戦の中、本陣を死守していた恒興も今はこれまでと床几に座ったまま家康直臣永井伝八郎に自決同然に首を授けた。享年四十八歳。父の死を知った紀伊守之助も死を覚悟して引き返して敵陣に突入、二十六歳を一期に壮烈な討死を遂げここに中入り隊は壊滅した。二男・輝政は父や兄と共に死なんとするが重臣が懸命に引き止めたと伝わる。

その後の森家、池田家

秀吉は悲嘆に暮れる両家のために何かと気を配り格別に目を掛けた。森家については、長可の遺言とは異なるが、末弟・千丸を兼山城主とし長可の遺領を継がせ森家重臣の各務元正等に後見させた。その後、成人した千丸（忠政）は関ヶ原の前から、父兄の仇である家康に親近し徳川方で終始し明治まで家名を残した。

秀吉は、池田家については輝政やその幼弟達を引き立てることを約束するのである。恒興の母・養徳院に宛てた秀吉の手紙は実に情の細やかなものであり人の心を打つものがある。輝政は小田原陣後の、文禄三年（一五九四）に秀吉のお声掛かりで父や義兄や兄の仇とも言うべき家康の二女・督姫を娶ることになる。

督姫は家康の次女である。徳川家と北条家が同盟を結んだ天正十一年（一五八三）に十九歳で後に北条氏五代目の当主となる氏直と結婚したが、秀吉の小田原征伐で降伏した氏直が高野山で病死した天正十九年（一五九一）には子にも恵まれず（異説あり）に実家に戻っていた。

秀吉は、長久手の合戦がしこりになっていると思われる徳川・池田両家の仲を取り持とうとしたのであろうか。秀吉は輝政が妻子持ちであることを当然承知の筈だから、それを承知で話を勧めたのであろうか。

当時、輝政は既に中川清秀の娘・糸子と結婚しており、天正十二年（一五八四）に糸子は嫡子・利隆を生んだ後に体調を崩して実家で療養していたのである。病が癒えぬとはいえ正妻糸子を離縁しての結婚だけに輝政の悩みも深かったと思われる。しかしこの家康の娘との結婚が池田家に大いなる幸運を齎すことになるのだから人の運命は判らない。秀吉の大度が後に裏目に出ることになったと筆者は考えている。

家康は徳川の家のために北条氏直と政略結婚をし、その夫とも子にも恵まれず離縁となった督姫を不憫に思い何とか幸せにしてやろうと腐心していただけに、太閤秀吉のお声掛かりで秀吉が引き立て

ていると聞こえ、前途有為な青年大名池田輝政との婚姻には無論、異存は無かった。

輝政は督姫との間に忠継、忠雄を始めとする五男二女をなして岳父・家康を大いに喜ばせ家康の深い感謝と信頼を得て格別の引き立てを受けることになる。豊臣系の有力大名から親徳川陣営に移ることになったのである。

秀吉没後、輝政は家康方で終始し、関ヶ原の役での東軍西上では福島正則と東軍の先鋒を務めその昔、城主であった岐阜城攻めでは福島正則と共に一番乗りを果たした。関ヶ原本戦では、義弟となる浅野幸長と共に南宮山に対する備えとなったため、さしたる軍功は無かったが、戦後一躍、播磨姫路五十二万石の大封を得た。一時は子弟の石高を合わせると百万石近くとなり西国将軍と謳われるまでになったのも自身の武功もさることながら督姫との結婚が極めて大きいのである。池田家は外様の雄藩として明治に至るまで家名を残し秀吉恩顧大名の福島正則・加藤清正とは大きく明暗を分けたのである。

輝政は秀吉の恩顧をも忘れず豊臣家に心を残しつつも徳川寄りの大々名として生き残り、慶長十八年（一六一三）、大坂の陣始まる前にその波瀾に富んだ生涯を閉じた。享年五十歳。やや早い死であるが豊臣、徳川双方に縁の深い輝政としては板挟みにならなかったことはせめてもの幸せであったかも知れない。この頃、秀吉恩顧の有力大名が相次いで死亡したので、徳川方による暗殺説も出たとの話もある。話としては面白いが事実是不詳である。

尚、後日談であるが、離縁されて実家に戻りやがて病の癒えた糸子は実弟・秀成が転封された豊後岡城で静かにその生涯を閉じた。元和元年（一六一五）、亡夫・輝政に遅れること二年であった。父・清秀を賤ヶ岳で失い、すぐ下の弟で家督を継ぎ秀吉に従い戦功のあった秀政も文禄の役で戦傷死し、秀政の弟・秀成が跡を継いだ実家中川家であった。糸子の生涯は戦乱の世に運命を弄ばれた悲劇の生涯であったが秀成は薄幸の姉をいたわり終生暖かく接したと伝わる。

輝政の跡目は継室督姫（その頃は播磨御前と呼ばれ家康の娘ということもあり権勢を誇り、先妻・糸子の生んだ利隆を廃嫡し自分の産んだ息子・忠継に跡目相続させようと画策していたとの話が遺されている。事実か否かは不明であるが毒饅頭事件が起きたとされる）の動きもあったが、最終的には年長で人望のある利隆が輝政の跡を継いだのであった。糸子がそれを知った後に旅立ったのはせめてものなぐさめであったことであろう。

糸子の実家中川家も関ヶ原では徳川方に付き明治まで存続した。因みに織田氏に仕え、秀吉の有力大名となった堀家も名人左衛門と称された一大の傑物久太郎秀政の二代目久太郎秀治が関ヶ原合戦では家康方に付き、堀家も明治まで家名を残したのである。秀政の従兄弟で重臣であった堀監物直政（斯波氏の一族奥田氏）の流れも、宗家とは別に大名となり明治まで続いた。長久手の合戦はその重要性の割にはそれほど有名ではないが、参戦した諸将の興亡を子細に見るとなかなか興味深いものがあると思う。

主たる参考文献

小和田哲男『秀吉の天下統一戦争』吉川弘文館

『日本戦史第13巻 小牧役』参謀本部編、村田書店、

『長久手町史 史料編六 長久手合戦史料集』『長久手町史 本文編』長久手町史編さん委員会編、長久手町役場

『秀吉覇権への道』南条範夫 講談社

『太閤記』 『徳川実記』